

530406



政務局

大正二年八月調査

次



満洲現状一斑

上

大正二年十月秋山海軍大佐了送附
揚子江に於て

秋山海軍大佐報告

大正二年十月秋山海軍大佐了送附
下巻附圖印刷中下巻より次巻へ送



1614 6

1402

手形
原
送

10月

530466

滿州現狀一斑

○ 目次

第一章

地理的現狀

第二章

政治的現狀

第三章

軍事的現狀

第四章

經濟的現狀

MT

1614 6

1403

REEL No. 1-0653

0030

○ 凡例

- 一、滿州トハ主トシテ東三省(奉天、吉林、遼寧)ノ意味スト雖モ必要ニ應シ之ト密接ノ關係アル内蒙古ニモ訖及セル處アリ
- 二、内蒙古ノ地域中已ニ支那ノ行政上ニ於テ東三省ニ編入サレタル部分アリテ一般ニ認メラレタル省域ト異ナル處アリ之等ハ凡テ現行政區域ニ據ル
- 三、黒龍江省ノ西部興安嶺以西ノ地域ハ已ニ獨立ヲ宣言シテ外蒙古ニ屬シ支那ノ政令ニ服セサルモ尙ホ暫ク黒龍江省ニ屬スルモノト看做ス
- 四、南滿州ト北滿州ノ區分ハ長春ノ緯線ヲ以テ境界トスレトモ所謂日露兩國ノ勢力範圍トハ一致セス

MT

1614 6

1404

滿州現狀一斑

第一章

地理的現狀

一 地積

○滿州ノ總面積六萬三千六百餘方里其ノ大々朝鮮ニ約三倍ス地勢北方ハ大小興安嶺、東方ハ長白山ノ諸山脈ヲ以テ森林ニ富ムル山地ヲ形成シ、中部ヨリ南四方ニ亘リテ耕牧ニ適セル大平原ヲ有シ、松花江ハ北滿ノ流水ヲ集メテ北方黑龍江ニ注キ、遼河ハ南滿、東蒙ノ河川ヲ合セテ南方渤海ニ朝ス、左表ハ東三省ノ面積及山地平原ノ百分比列シ畧示ス(附表参照)

省別	面積 方里	山地 百分比	平原 百分比
奉天省	一五九四九	五	一八
吉林省	一五六八五	一九	八

黑龍江省	三四〇二七	四五	一五
------	-------	----	----

(備考) 之ニ據リテ計畫スルトキハ、滿州ノ平原可耕地ハ朝鮮ノモノニ約六倍スルモノト認メラル、而シテ地味ハ朝鮮ヨリ遠ニ肥沃ニシテ未タ農作ニ肥料ヲ要セス、未耕地モ亦頗ル多シ、唯タ夏季ノ短キメ多クハ農産一作ヲ收メ得ル

○右表ハ支那政府ノ現行政區域ニ基キ東三省ノ地積ヲ示セルモノナルモ、支那政府ハ南方ヨリ移民カ東蒙古ノ地域内ニ増殖スルニ從ヒ漸次其ノ部分ヲ直隸省若ハ東三省ニ編入シテ省政ヲ布キワ、アルヲ以テ、所謂滿州ノ地域ハ年々逐ク西方ニ向ヒ擴張セラレ、從テ滿蒙ノ區分ハ實際不確實ナルニナリ、今過去十數年ニ於テ東三省ニ編入セラレタル東蒙ノ旗領ヲ掲ケテ參考ニ供ス(附表参照)

MT

1614 6

1406

MT

1614 6

1405

東蒙古旗領	綏入省名	新府縣
綏遠右翼後旗	奉天省	鎮東縣
今 右翼前旗	今	北寧府 遼中縣
今 右翼中旗	今	臨泉縣
今 左翼中旗	今	遼源州(新家屯)
今 左翼後旗	今	懷德縣
今 左翼前旗	今	康平縣
今 後旗	吉林省	彰武縣
郭爾羅斯前旗	吉林省	長春府 農安縣
今 後旗	黑龍江省	德惠縣 長嶺縣
杜爾伯特旗	今	洮安縣
扎賚特旗	今	大赉縣

二、氣候

○滿州ノ氣候ハ概ネ大氣乾燥ニシテ寒暑共ニ酷シク奉

天附近ニ於テ冬季ノ最低溫度ハ零下三十二度(華)ニ下リ夏季ノ最高溫度ハ百〇四度ニ上リトアリ、季節ハ夏冬長クシテ春秋短ク、十月ヨリ翌年三月迄ハ冬季ニ屬シ、南端ノ諸河川ハ十月中旬ニ結氷シテ翌年三月下旬ニ解氷シ、北端ノモノハ稍々結氷期間長ク、松花江ノ如キハ十月止旬ヨリ四月中旬ニ亘リテ半年間氷結ス

雨季ハ六月ニ始リ八月ニ終リ降雨多量ナルモ、冬季ノ降雪ハ比較的少量ナリ

○如上滿州夏季ノ炎熱ト多雨トハ短季節ニ農産ノ興ケシムル天恵ナルモ、其ノ冬季ノ長キハ年中ニ亘レル土地經營ノ一大支障ニシテ、為ニ農民ヲシテ一定ノ稼業ヲ繼續スルニ困難セルム

三、人口

MT

1614 6

1408

MT

1614 6

1407

○東三省民政司署ノ最近調査ニ據ルハ滿州ノ人口總計千八百五十万ニシテ之ヲ三省ニ區分シ其稠密ノ程度ヲ示スル表ノ如シ

省別	人口	一万里ノ平均密度
奉天省	一、〇九三、二七五	七九五
吉林省	五、五三四、九九九	三五三
黑龍江省	一、八七九、三九九	五五

即チ人口ハ南方ヨリ北方ニ至ルニ從ヒ著シク稀薄トナリ、南滿、奉天、海城附近ノ密度ハ一万里ニ三千人ヲ超スルモ北滿、黑龍江省ノ山地ニ入レハ一万里五人ニ充タサル部分多シ

（附圖）
前記定住民ノ外高年々農作ノ季節ニ山東省等ヨリ滿州ニ出稼スル約六十萬ノ移民アリ此ノ移民ハ南北

滿州及内蒙各地ニ分散シ其約四分ノ三ハ業ヲ了リ蓄財シテ毎年郷里ニ還リ他ノ四分ノ一ハ滿州ニ止マリ土著トナリ、滿州全境ノ人口ヲ過去數年ノ間ニ百萬位ヨリ千萬位ニ向上シタルハ主トシテ此等移民ノ激增ニ起因セルモノニシテ、今ヤ本来ノ主人タル滿族ハ僅カニ其ノ百分ノ五ニ減少シ其他ハ皆漢族トナレリ

○滿州ニ居住セル外國人ハ比較的僅クニシテ最近ノ調査ニ據ルハ其ノ人口左表ノ如シ

人種	人口	記
日本人	八七、六四一	内約四萬五千ハ関東租借地内ニ住シ其他ハ四萬餘ハ鐵道沿線ニ散布ス
朝鮮人	三、五八、七五八	内約二萬八千ハ國境ニ近キ間衝ニ住シ其他ハ南滿ノ各地ニ散布ス
露國人	六〇、〇〇〇	内約四萬ハ哈爾濱ニ住シ其他ハ東清鐵道沿線ニ散布ス
他外國人	八〇、〇〇〇	主トシテ開港地ニ居住ス

MT 1614 6 1410

MT 1614 6 1409

四物産

(備考) 本表ノ人口ハ軍隊ヲ算入セス
 之ヲ以テ見ルトキハ日露戦役後約九年間ニ於ケル日本人ノ滿
 洲移住口數ハ支那山東移民一年間ノ残住口數ニスラ
 及ハス

○滿洲ノ物産ハ農産ヲ主トシ、畜産及林産之ニ至リ、鑛
 産ノ地點ハ全境各地ニ散在セルモ林掘サレアルモノ未ダ少シ
 (参考)

○農産ノ主要ナルモノハ穀物ニシテ昨年度ニ於ケル其ノ
 種類産額左表ノ如シ

種類	省別			合計
	奉天省	吉林省	黑龍江省	
大麥	五四、〇〇〇	八五、〇〇〇	一〇二、八〇〇	二四一、八〇〇
小麥	七三、〇〇〇	二五八、〇〇〇	一、九八一、〇〇〇	五二八、〇〇〇
蜀黍	六八九七、〇〇〇	五五五、〇〇〇	一、八三九、〇〇〇	一四、二七七、〇〇〇
粟	五八一、〇〇〇	三、六一、〇〇〇	二、九三一、〇〇〇	一、一八、〇〇〇
玉蜀黍	一〇五、〇〇〇	八八、〇〇〇	七八、〇〇〇	二七一三、〇〇〇
大豆	五三五、〇〇〇	四一、九〇〇	二、五三六、〇〇〇	一、六〇〇、六〇〇
菘雜穀	四二二、〇〇〇	三、一九七、〇〇〇	二、二四九、〇〇〇	九、六五七、〇〇〇

(備考) (一) 雜穀ノ主要ナルモノハ小豆、綠豆、燕麥、蕎麥、
 胡麻米等ナリ

(二) 水田米作ハ尙ホ、試験時代ニ屬スニトモ若シ可
 十一年々數百萬石ヲ收穫シ得ニ適地アリ

右ノ外農産物トシテ價值ノ稍ヤ大ナルモノハ蔬菜(滿洲
 〇九三、〇〇〇、實) 苳(吉林、
 〇四三、〇〇〇、實) 及柞蠶(奉天、
 〇四三、〇〇〇、實) 等ナリ
 ○畜産、最大ナルハ東蒙古ニシテ奉天省之ニ亞ケリ、關

MT

1614 6

1412

MT

1614 6

1411

東都督府ノ最近調査ニ依ルハ其ノ種類及現在頭數在表ノ

種類別	奉天省	吉林省	黑龍江省	東蒙古
牛	四四三、七〇〇頭	一一三、〇〇〇頭	一四八、〇〇〇頭	九六五、〇〇〇頭
馬	七九六、〇〇〇	一九二、四〇〇	四八三、〇〇〇	七二〇、三〇〇
騾	一九六、三〇〇	二〇五、〇〇〇	五六八、〇〇〇	二五八、〇〇〇
驢	三三三、七〇〇	二一〇、〇〇〇	一七〇、〇〇〇	五八八、〇〇〇
羊	五六六、〇〇〇	九〇、〇〇〇	八〇〇、〇〇〇	一〇六九、五〇〇
豚	三〇二、四六〇	六三三、六〇〇	四二六、九〇〇	二四〇、二〇〇
家禽	四八二、八〇〇	一、四九一、〇〇〇	一、六八五、〇〇〇	不詳

前記農産及畜産ノ多量ナルハ日露戦役中百萬ノ露軍カ
遠ク本國ヲ離レテ一年有餘ノ糧食ニ窮乏セザリシ所以
ニシテ、現時哈爾濱ニ於ケル十數ヶ所ノ製粉所注節家

由ニ於ケル十數家蓄問屋ノ如キ皆此戦役中ニ救興レ
テ巨萬ノ資産ヲ成セルモノナリ

○林産ノ材木ハ滿州ニ於ケル現在及将来ニ於ケル有望ナ
ル物産ニシテ、其ノ産出森林ハ高木無盡蔵ト認メテ可ナ
リ、而シテ其ノ運搬ノ徑路ニ依リ左ノ三種ニ稱別セラレ

- 一、鴨綠江材
長白山脈ノ南麓ヨリ伐出シ鴨綠江
ニ依リ丹東ニ流出スルモノ
- 二、吉林材
長白山脈ノ北麓ヨリ伐出シ松花江
ニ依リ吉林ニ流出スルモノ
- 三、東清鐵道材
北滿東清鐵道ノ沿線ヨリ伐出シ
鐵道ニ依リ搬出スルモノ

此ノ三種ノ伐材ハ其ノ材料素質ニ於テ大ナル差等ナレト
雖モ其ノ運搬ノ難易ニ基キ各地其ノ價格ヲ異ニシ東
清鐵道材ハ長春ニ於テ吉林材ヲ壓シ、高木奉天ニ於
テ鴨綠江材ト拮抗セルノ現状ナリ又此東清鐵道材ハ
北滿一帶ニ於ケル燃料ノ大部分ヲ占メ、東清鐵道才之

MT 1614 6 1414

MT 1614 6 1413

依リテ運轉セルコト尚ホ南滿鐵道、撫順炭、於之
カ如シ

○鑛產ニ就キ開東都府ノ調査ニ依リハ、滿州各
部特ニ奉天吉林兩者ノ東方山地ニハ金銀銅鐵及
石炭等ノ產地頗ル多シ、然レトモ未夕精確ニ試掘調査
サレタルモノ真ニ少ク其ノ含鑛ノ多寡良否ノ測定得
ルニ至ラズ、左ニ現ニ採掘サレシ有數ノ鑛坑ヲ掲ク、

奉天省		產地		鑛種		產出年額	
撫順	石炭	撫順	石炭	一四七、〇〇〇			
烟臺	同	烟臺	同	四三、〇〇〇			
本溪湖	同	本溪湖	同	一〇八、〇〇〇			
牛心臺	同	牛心臺	同	五五、〇〇〇			
木溪湖	鐵	木溪湖	鐵	未詳ニ製鐵ヲ開始ス 鑛量豊富ナリ			

吉林省		黑龍江省		龍江省		滿州里	
灰皮溝 (松花江上流)	砂金	呼瑪爾河 (湯原縣)	砂金	滿州里 (海拉爾)	石炭	石炭	本年大規模採掘ニ着手ス
石嘴子 (盤石縣)	銅	都魯河 (湯原縣)	砂金	扎蘭諾爾 (海拉爾)	石炭	石炭	四七七八噸
天寶山 (延吉府)	銅及銀	觀音山 (瑯琊縣)	金	吉拉林 (海拉爾府)	金	金	產額不定
三姓 (依蘭府)	金		金		金	金	一八〇、〇〇〇兩
二姓 (依蘭府)	金		金		金	金	二八〇、〇〇兩
	銅及銀		金		金	金	現特營業中止
	砂金		砂金		砂金	砂金	產額不定
	產額不定		產額不定		產額不定	產額不定	產額不定

○工業ハ滿州ノ工業未夕幼稚ノ域ニアルヲ以テ特記ス
ハ其ノ才ニ但シ農産ヨリ製出スル麥粉、豆油、豆粕及燒酎
ハ其ノ數量多額ナリ又開東州附近ノ製塩モ有望ノ工

MT

1614 6 1416

MT

1614 6 1415

五、交通

産ニ敷ルニトシ得

○満州内地交通ハ鐵道ヲ主幹トシ、河運及陸運之ニ亞リ、鐵道ハ其ノ輸送速度大ナルモ、未タ其ノ大部分ノ單軌ナルト車輛ノ數量甚多ナラレトシ以テ尙ホ輸送力増加ノ餘地少シトモ、河運ハ遼河、松花江ノ如キ天然ノ大水流ヲ利用セル數千艘ノ支那船ニ依ルモノニテ、其ノ輸送量ハ比較的大ナルモ其ノ速度ノ較ヤ遅キト冬季約五ヶ月間、休止トシ、爲メ鐵道ノ力ニ及ハス、陸運ハ滿州ノ平野到處ノ道路ニ應用セルハキ滿州式荷馬車ニシテ其ノ數量莫大ナルヲ以テ恐ラハ輸送機關ノ最大ナルモノナルヘク唯タ夏季ハ道路溼惡ナルト馬夫馬匹ノ耕作ニ轉用ナル、モノ多キカ故ニ大ニ其ノ輸送力ヲ減ス(附参照)

MT

1614 6 1417

○鐵道ハ地圖ノ示スカ如ク、長春及奉天ヲ接續點トシテ南滿、東清、京奉、吉長、四鐵道會社ニ經營セラル、就中線路、車輛及停車場等設備最モ整備セルハ南滿線ニシテ東清、京奉ハ著シキ遜色アリ、吉長線ニ至リテハ其ノ經營宜シカラス収支相償ハナルノミナラス設備モ亦不完全ナリ、

南滿及東清兩鐵道ノ收益ハ貨物三分ノ一、乘客三分ノ一ト概算セラレ貨物ハ石炭及大豆其他ノ穀物ヲ大部分トシ鹽、木材、綿布等其次位ニヤリ、乘客ハ無蓋車ニ甘スル山東移民、四等客ヲ最上顧客トシ、美麗ナル寢臺車ノ一等客ヲ最大顧客トス

MT

1614 6 1418

右既成鐵道ノ外尙ホ計畫中ノ支線左ノ如シ

一、南滿線本溪湖驛ヨリ、城廠ニ至ル輕便支線

一、東清線對青山驛(哈爾濱)より綏化及通肯等ヲ經由シ通北ニ出テ東西ニ分岐シ西ハ拜泉、東ハ松花江ニ至リ支線 東清鐵道經管

一、南滿線四平街驛若ハ長春驛ヨリ洮南府ニ至リ支線 日支合辦 現ニ交漢中トナリ

一、南滿線開原驛ヨリ吉林省海龍ニ至リ支線 日支合辦 現ニ交漢中トナリ

一、京奉線錦州驛ヨリ朝陽ニ至リ支線 日支合辦 現ニ交漢中トナリ

○河運ハ滿州ニ於ケル舊來ノ交通ヲ主管シタルモノニシテ南滿ハ遼河、北滿ハ松花江ノ水流ヲ利用ス然レトモ近時鐵道ノ輸送力増進シタルト河深ノ漸次減少シタルト々々年々逐フテ衰頽ノ傾向ヲ示セリ、左ニ前記兩大河ノ輸送力要領ヲ掲グ

河名	船航域	船航域	航平均航程	航季	航量
遼河	自河口至年莊	自三河口至合三	三十日	自三月中旬至土月下旬	三五〇〇度
松花江	自吉林口至合林	自樺甸至合林	七十日	自四月中旬至十月上旬	一五〇〇度

(備考) 松花江ニハ高水汽船ニ使カル、貨船甚々多シ

○陸運ニ使用スル滿州ノ荷馬車ハ大抵二頭乃至九頭ノ駄馬ニテ挽カレ、其ノ數量ハ萬ヲ以テ算セラレ、一車ノ積載量三乃至四石、一日ノ行程十乃至十五里ナリ

此等ノ荷馬車ハ大抵農家ノ所有ニ屬シ冬季農事閑散ニシテ道路氷結セル期間ニハ著シキ輸送力ヲ發揮シ早ニ内地ヨリ鐵道及河運ニ對シ貨物集散ノ媒介ヲナシハノミナラス、其運賃低廉ナルヲ以テ(冬季農家ハ馬ヲ休ムルニ便シク)冬ニ於テハ鐵道及河運ニ對シ貨物集散ニ於テハ鐵道及河

MT 1614 6 1420

MT 1614 6 1419

530475

運ト競争スルコトアリ、蓋シ鐵道線路漸次ニ延長シテ
其ノ輸送力現時ノ數倍トナルモ、滿州平野ノアラン限リハ
此荷馬車ノ輸送力ハ増進スルモ決シテ減退スルコトナカル
ハシ

MT

1614 6

1421

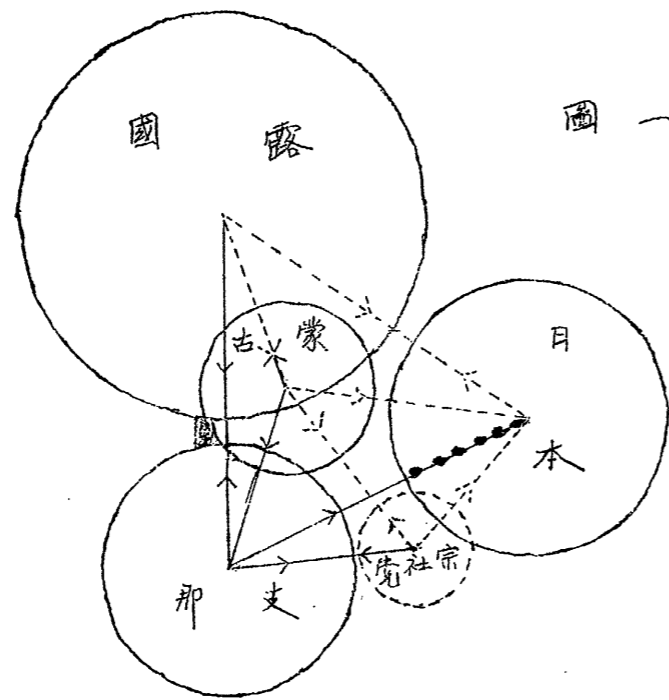
REEL No. 1-0653

0040

一般形勢

第二章 政治的現状

○ 満州及蒙古ハ表面ニ於テ支那ノ治下ニアルヘキト言フヲ俟
 タスト雖モ日露西國ハ陰然滿蒙ヲ区分シテ其ノ勢力範圍トシ
 各其ノ鐵道附屬地帯ニ對シ公然其ノ施政ヲ行ヒ、尙ホ其ノ以外
 ニニ威カマシ及ホシ又蒙古ハ昨年ノ支那革命後民國政府ノ政令
 ニ抗シ、露國ノ後援ニ依リ事實上已ニ獨立ノ体裁ヲ成シ、加之
 清朝ヲ恢復セントスル所謂宗社黨モ南滿ニ伏在シテ多少ノ潛
 勢力ヲ有シ、今や滿蒙ニ於ケル政治上ノ内情ハ混亂複雑ニ
 テ將來ノ變化ヲ遂睹ス可ラザル形勢ヲ呈セリ、即チ左ニ此等政治
 的カ素ノ交感ヲ圖示ス



第一圖

圖解

- 一 實圈ハ表面ニ現在セル勢力ヲ示シ、點圈ハ裏面ニ伏在セル勢力ヲ示ス
- 一 圖ノ大小ハ勢力ノ多少ヲ示ス
- 一 圖ノ相交又セルテハ其ノ一方勢力カ他方ニ及ヘルヲ示ス
- 一 實線之ヲ接續セル兩圈ノ交感ヲ示シ、點線ハ好感ヲ示ス而シテ、矢符ハ其ノ働ク方向ト程度ヲ示ス

MT

1614 6

1423

MT

1614 6

1423

○右ノ四者ハ各其ノ政治上ノ目的ヲ異ニシ其ノ主義手段等モ亦相異レリ今其從來ノ行動及施設等ニ鑑ミ之ヲ推度スルトキハ大要左表ノ如クナルヘシ

國別	目的	主義	手段
露國	利權獲得	威壓的	自力ト他カトヲ利用シテ現狀ヲ養ヒ其目的ヲ達セシム
日本	利權獲得	正義的	自力ヲ以テ現狀ヲ維持シ其目的ヲ達セシム
支那	利權獲得	權術的	他カト利用シテ現狀ヲ維持シ其目的ヲ達セシム
蒙古	領土自衛	力爭的	他カト頼リ自力ヲ以テ其目的ヲ達セシム
宗社黨	清國復得	陰險的	他カト自力ヲ利用シテ其目的ヲ達セシム

以上ノ滿蒙ニ於テ政治的形勢ノ梗概ヲ表示スルニ過キス以下順テ逐々其政治的要素ノ政策行動等ニ就テ其近狀ヲ詳説セントス

二 於滿蒙ニ露國ノ近狀

○昨年末露國ノ滿蒙經營ハ著シキ發展ヲ遂ケ今ヤ新疆及外蒙古一帯ノ大地域ハ事實トシ其ノ占有ニ及ビ北滿ノ大部分モ亦其ノ勢力範圍タルノ實ヲ舉グルニ至レリ即チ左ニ其ノ末歴ヲ畧叙スヘシ

昨年春清朝亡滅シテ支那民國政府ノ成立スルヤ内外蒙古ノ諸王公ハ新政府ノ政令ニ服セス庫倫活佛ヲ盟主トシ先ツ蒙古ノ獨立自治ヲ圖リ高ル進シテ民國政府ヲ破壞セント欲シ東方日本ノカヲ借ル能ハスレバ北方露國ニ後援ヲ乞ヘリ是ニ於テ露國ハ奇債居ラヘト看取シ表面ニ支蒙間ノ調停ヲ裝ヒテ裏面ハ蒙古ノ自立ヲ煽動シ庫倫ト露京ノ間ニ相互使節ノ來往等アリタル後四月下旬ニ至リ軍費ノ貸其及兵器彈藥ノ供給ノ如キ具體的援助ヲ蒙古ニ與ヘ其ノ代償トシテ蒙古内地ニ鐵道敷設自動車運轉其他軍隊派遣將校備聘等ノ

MT 1614 6 1425

MT 1614 6 1424

特權ヲ得たり。是レ實ニ露國カ多年經營シタル南假企圖ノ外
面ニ現ハレタル齟齬トス

爾來庫倫活佛ハ露國ノ後援ヲ借リテ類リニ獨立運動ノ
先武ヲ進メ、蒙古政府ヲ組織シテ自治基ヲ定メ蒙古軍ヲ編
成シテ自衛ノ計ヲ成シ、終ニ七月ニ入リ駐蒙ノ支那軍隊及
官憲ヲ悉ク境外ニ放逐シ、支那ノ新曆ヲ廢止シテ自ラ共
ト改元シ、國號ヲ蒙古ト稱シテ公然其ノ獨立ヲ宣言シ、露國
亦之ヲ承認セル此間又滿蒙ニ関スル日露新協約モ成立シ、
ノ如ク、為ニ露國ハ他ニ憚ルコトナク、其ノ進取ノ手腕ヲ伸ハシ、
十月ニ至リ、彼ノ露蒙協約成立シテ露蒙ノ關係ハ遂ニ動カス可
ラシ根底ヲ確立スニ至リ、此協約ハ事實上外蒙ノ全土ヲ奉
テ露國ノ保護ノ下ニ置キタルモノニシテ、該協約及之ニ附添セル議定書ノ
各條項ヲ吟味スルニ之ニ依リテ得タル露國ノ特權ハ統監政治時代

MT 1614 6 1426

ニ於テ我日本カ朝鮮ニ對シテ得タルモノヨリモ遙ニ優越ニシテ、其名ハ
蒙古ノ獨立ナルモ其ノ實ハ露國ノ屬領タルニ異ラス(露蒙協約及議定書ヲ參照)
露國ノ煽動ハ軍ニ外蒙ノミニ止ラス、是ヨリ先キ八月内蒙ノ札薩克
圖王烏恭禿毛亦露國ノ教唆ト後援ニ依リテ其ヲ奉テ獨立ヲ宣
シ、外蒙活佛ヨリノ援軍ト合シテ所在ノ支那兵ヲ驅逐シ、進ニテ
洮南府及大巴林府等ヲ占領シ、東蒙ノ諸旗又之ニ應ニ、其ノ
勢頗ル猖獗ナリシハ、南滿鐵道ヲ借リテ輸送サレタル支那征蒙
軍ノ勢力優勢ナリト、露國カ兵力上ノ後援ヲ中絶(日露協約
ニ依リテ)ニシテ、依リ、此ノ獨立運動ハ遂ニ失敗、師ハ烏恭禿ハ軍破
レシ九月中旬庫倫ニ逃竄セリ、然レトモ露國ハ更ニ轉シテ呼倫
貝爾(烏龍江省興安鎮)ノ經略ニ着手シ、蒙ニ封援シタル
外蒙ノ將勝福カ軍ヲ退ケテ此地ニ在ルヲ機トシ、之ニ兵力ヲ援
助ヲ與ヘ、所在ノ蒙古人ヲ煽動シ、勝福ヲ戴キテ總督トシメ、駐

MT 1614 6 1427

在セル支那軍隊及官憲ヲ域外ニ放逐シ庫倫政府ニ隷屬シ此ノ
 地域ノ獨立ヲ宣言セリ是實ニ昨年十月十五日午ニシテ恰モ前記外
 蒙ニ於ケル露蒙協約ノ成立ニ向テ故ニ北滿ノ一部ニシテ黑龍江省
 ノ西部三分ノ一ノ地域モ亦外蒙ノ一帯ト共ニ事實上露領ニ歸スル
 ニシテ今ヤ此地域ニ殘留セル支那官憲ハ唯又國境ニ近キ滿州里
 (驛道)ニアル秘閣官吏アルニ而テ露國カ其ノ存置ヲ忍容セルモ
 ハ日清條約ニ據リ滿州里ヲ開市セラルルノ故ナランカ

露蒙協約カ昨年十月三日庫倫ニ於テ調印セラレ其ノ内容ノ外部ニ
 喧傳セラレヤ支那政府ハ大ニ駭キテ之ニ抗議シ爾來曲折セル露
 支間ノ交渉良キニ直リ其ノ間支那ハ讓歩ヲ重テテ露支協約等
 ノ提案アリシモ露國ハ終始露蒙協約ノ本據ヲ固持シテ毛頭讓歩スレ
 ナ且ツ斯ノ如キ談判ノ終ニ自方ニ不利ナルヲ認メ本年七月ニ至リ爾後
 自由行動ヲ取ルヘキトテ宣言シテ其ノ關係ヲ断テリ其ノ末尾ニ曰ク

露國政府ハ支那トノ間ニ何等協約ノ締結セラレ追合悉徒來ノ如ク
 露蒙協約ニ據リ其ノ關係ヲ定ムルニテ表明スル其義務ナリト
 思惟スト之ヲ以テ見ルトキハ露支間ニ於ケル蒙古問題ハ一般ニ認メ
 ルル如キ未定ノ懸案ニアルニシテ露國ハ外交ノ辭令ヲ以テ巧ニ之ヲ
 掩テ下シテト謂フヘク其ノ近時ノ對蒙行動ハ事實上ニ於テ其眞
 意ヲ證明シ今ヤ露國ハ步兵一旅團ヲ庫倫ニ駐屯シ尙モ哥薩
 克騎兵聯隊ヲ蒙古内地ニ分屯セシメ蒙古軍隊ハ自國ノ將校ヲ以テ訓
 練教導シ又支那政府カ呼倫貝爾方面ニ増兵セントスル峻拒シテ之
 ヲ容ルサズ從來ノ駐蒙領事ハ一躍昇任シテ外交監督官(總監)ト
 ナリ活佛政府ニハ行政、財政、軍事等ノ各顧問官ヲ入レ以テ殆ト全ク
 外蒙ノ政權ト兵權ヲ掌握シ居リ愚昧ノ蒙人モ此ニ至リテ前日ノ
 非ヲ悔悟セルノ少カラスト雖モ最早斯ノナリテハ奈何トモスル能ハス
 若シ隘ニ抵抗セル唯モ露國ノシテ併合ノ口實ヲ得ルニ便ナランカ

MT

1614 6

1429

MT

1614 6

1428

過キナルナリ

○ 露國ハ如上ノ成功ヲ以テ未タ満足セザルカ如ク豫テ黑龍江省内
 於テ牧地ノ租借、鑛山林地若ハ鐵道敷設等利權ヲ獲トスルモ宋
 黑龍江省都督カ之ニ應キルヲ以テ本年七月急ニ北滿護境軍團ノ
 一部ヲ齊ハハル(黑龍江省)ニ集中シ、其ノ威壓ニ依リ、同府駐在露國領
 事ハ此少ノ口實(露人新聞記者ノ家宅搜索、露國郵便物ノ検査)ヲ以テ、世四
 時間内ニ宋都督及其ノ屬僚ノ退去ヲ迫リ、遂ニ之ヲ省外ニ放逐セリ、斯リノ
 如キ國際ノ常規ヲ無視セル強暴至極ノ措置ニシテ、又以テ露國カ支那ナリ
 視セザル程度ト其ノ北滿ニ及スル執力多クヲ推測スルニ足ヘラ、支那政府
 ハ之ニ對シテスラ最早抗争スルノ意氣ヲ、直ニ前都督ノ過失ヲ謝シ、更ニ
 無為ニ新都督ヲ派遣シ、僅ニ其、休養ヲ修補シ、止リ、爾來唯テ露國
 軍憲ノ鼻息ヲ窺ヒテ形式ノ有政ヲ施セルニ過キ、故ニ興安嶺以東黑
 龍江省ノ殘部約三分ノ二モ亦事實上露國ノ權勢ニ服従シ、モト認メ

テ可ナク、而シテ露國ハ此ノ一舉ニ由リ、益支那政府ノ共ニシ易キヲ看破シ、更
 ニ進テ吉林省ノ北部ニ其壓カヲ加ントスルモ、如ク、昨今馬賊ノ跳梁
 ソ口實トシテ頻リニ省内地ニ軍隊ヲ派遣シ、又借款ヲ以テ全省ノ財政ニ手
 ヲ染メントシ、テ、其ノ勢力範圍タル北滿全部カ悉ク露國ニ
 料理サルノ日モ亦遠キニアラサルヘシ
 又露國ハ内蒙古ニ對シテモ決シテ其覬覦ヲ断念セザルニテ、素ヨリ
 露蒙協約及其ノ最後ノ宣言ニ於テハ、蒙古トハ内蒙ヲ除キ、蒙古全部
ヲ意味スル。昔ノ明記ニ、且ツ日露協約ニ對シ、日本ノ勢力範圍内ニ其ノ軍
隊ヲ侵入セシムルカ如キニテ、慎重ト雖モ、夫ハ唯々表面ニ於ケル一時ノ手段ニ
シテ、裏面ニ於テハ内外蒙古人ヲ教唆煽動シ、北支那ニ對シテ攻勢ヲ執リ、
間接ニ南方侵略ノ前驅ヲ為シ、將來ノ好機ヲ見テ、其ノ野心ヲ遂セントス
ルモノ如ク、今春庫倫ニ會合シ、蒙古諸王公(露國人顧問)ハ内外蒙古
ヲ聯合シ、内外區別ヲ除キ、全蒙一國ノ獨立國トセントス、決議シ、但

MT

1614 6 1431

MT

1614 6 1430

内蒙各旗、諸公、合、利害關係、(内蒙之同意) 爾來内外蒙古軍、相混同、
 也、(内蒙之同意) 爾來内外蒙古軍、相混同、
 連繫シテ内蒙一帯ノ地域ニ出沒シ、(内蒙之同意) 爾來内外蒙古軍、相混同、
 鄂爾多斯方面ニ直リテ山西及陝西ノ北境ヲ脅カシ、中部ハ赤峯、
 リ、多倫、諾爾、ニ連リテ直隸ヨリノ征蒙支那軍ト對抗シ、又東部ニ於テ
 毛裏ニ失敗シタル烏、(内蒙之同意) 爾來内外蒙古軍、相混同、
 リ、故ニ若シ支那政府ニ之ヲ鎮撫スルノ力無キニ至レハ、内外蒙古ハ露國ノ
 後援ニ依リ一体トナリテ自立シ、往來ノ關係ヨリ自然ニ露國ノ管下ニ歸
 シ、(内蒙之同意) 爾來内外蒙古軍、相混同、
 所謂露協約ニ依リ相拒サルノ勢力増強ニ就テハ、日本ニ對シ度外
 ノ讓歩トシテ露國一軍ノ情ニ不満足セル所ニ至リ、動モスレハ中央政府
 ノ意志ニ反シテ遠東軍隊カ之ヲ無視セントスル行跡アルヲ認メテ露
 國從來ノ對外方針トシテ多大ノ權能ヲ遣外有司ニ賦與シ、中央ヨ
 リ制肘セズシテ之ニ任意ノ行動ヲ取ラシメ、事ノ起リタル後、已ハ得

ナル結果トシテ之ヲ是認スルコト多キヲ以テ、前記ノ豫想モ亦相慶ニアラサ
 ルナリ、

○ 以上ハ最近約年間滿蒙ニ於ケル露國ノ政治的情況ヲ略叙スルモノナリ、
 而シテ其ノ露國ニシテ横暴ナル政策カ此短日月ニ著々成功シタルモノハ、支那
 ノ無カシテ蒙古ノ無智ナルト同時ニ、滿蒙、蒙藏ニ関スル日露及英露ノ
 新協約ノ間接ニ其外ヲ助ケタルニ因ルトハ、雖モ、益ニ直接ノ主因ハ左列
 記セルニ由ニ在ルヘシ

(一) 露國ノ地位ヲ得タリ

(註) 露國ノ領土カ人烟稀薄ニシテ人文幼稚ナル外蒙一帯ニ接
 壤シ、且ツ南方ヨリノ交通極メテ不便ナル多ク、獨リ支那統治ノ
 權力普及セサルノミナラス列國外交ノ視力到達セザリシヲ以テ、其ノ
 行動ヲ隱蔽ニ經營シ容易ナラシメタルニ、我日本ノ朝鮮及関東
 州ヨリ比較的萬事ノ整備セル南滿及遼陽ノ内蒙ニ發展セントスルノ

MT 1614 6 1433

MT 1614 6 1432

困難ニ比スレハ素ヨリ同日ノ論ニテラス

(二) 露國ハ人和ヲ得タリ

(註) 南方侵略ノ慾望ハ露國官民ノ上下ヲ通シテ殆ト相一致セリ故ニ其極東經管上ノ失計(北滿ニ於ケル東清鐵道經管ハ今尚ホ不整理ノ實跡多ク又沿黑龍州德博ノ移民經管如モ任所の見地ヨリ)又ハ遼東有司間ノ軋輾(現東清鐵道長官ハハハハ中得策ヲ謀ル難シ)等アリト雖モ、大体ニ於ケル根本方針ヲ變如キ是レナリ

化セシムトナシ、加之東清鐵道長官及甚民政部負弁ニ滿蒙各地ノ駐劄領事等皆現役軍人ニシテ而カモ大抵多年ノ實歷ヲ經タル支那及蒙古通才ヲ以テ其行為ノ是非巧拙ヲ問ハス、滿蒙守備軍隊トノ意志能ク疏通シテ其協同動作ヲ容易ナラセタリ、已ニ此ノ人和ヲ得テ彼ノ地利ヲ占メタリ、天時到ラストスルモ、尚ホ能ク其意圖ヲ強行スルニ足ルヘシ、況ヤ其天時モ亦到レルニ於テオヤ

(三) 露國ハ時機ヲ得タリ

(註) 露國ハ終始南方侵略ノ志ヲ絶タスト雖モ、機會ヲ得スレテ平地ニ波瀾ヲ起スカキアトテ敢テスハキニアラス、然ルニ一昨年来支那革命亂ハ支那政府ヲシテ其全カヲ之ニ傾注セシメ、列強ノ耳目モ亦概シテ南方ニ牽引セラレタリ、露國ハ此ノ好機ヲ捕ヘ、大兵ヲ動スドトナシ、多資ヲ費スドト無クシテ、巧ニ年来ノ慾望ヲ逐フルヲ得タリ、然レトモ、斯ノ如キハ古来露國カ隣邦ヲ蠶食スル慣用手段ニシテ、昔シ清領タリレ今ノ西比利亞東部カ漸次露領ニ歸シタルモ亦今次ノ始未ト相似タル處多ク、既往ハ最早追フヘカラス唯ク歴史ニ鑑ミテ將來ニ留意スヘキナリ

三、滿蒙ニ於ケル支那ノ近狀

○ 支那ハ一昨年来内憂外患相踵テ起リ、清朝皇統ニ倒レシ民國政府未ダ其信望ヲ得ルニ至ラス、内ハ奉公ノ志士ニ乏シシ、上下悉ク利己ソ主トシテ國難ヲ痛マス、外ハ信義アル友邦ナク多クハ

MT

1614 6

1435

MT

1614 6

1434

人の疲弊を乘じて利ヲ營ミントシテ之を動亂、續發ト納稅ノ滯滞ハ借款ヲ重ナルモ尚ホ益々其財力ヲ枯渴セシメ常備軍隊モ亦嚮背常ナリ武カトシテ終始信賴スルニ足ラズ、而カモ尚ホ幸フシテ其形骸ト体面ヲ保持シ得ルモノハ、對支列強カ各其利害ヲ異ニシテ相拘制セルト、我日本カ始終正道ヲ踏ミテ他ノ貪欲ニ倣ハヤルヲ以テナリ、支那政府モ亦能ク此ノ間ノ子繁ヲ會得シ、巧ニ他カヲ利用シテ其彌縫ニ努メツ、アリ、特ニ滿蒙ニ於テ然リトス、左ニ其ノ情況ヲ畧叙スヘシ

○ 日露戰後滿州カ西支戰國ノ勢力範圍ニ區分セラルルハ支那亦之ヲ認知シ、清朝ノ當時ヨリ陰ニ陽ニ其領土保全利權回收ニカハルト同時ニ、英米諸國等ノ利權ヲ滿州ニ混入シ日露兩國ノ潛勢ヲ拘制セントシタルハ過去ノ歴史ナリ、然レニ昨春清朝倒レテ袁政府ノ成立スルヤ、從來支那ノ志滿タリレ内外蒙古ノ諸王族ハ悉ク民國特

ニ袁世凱ニ對シテ深刻ナル反感ヲ抱キ、各清祖ヨリ、職與サレタル自治ノ特權ヲ主張シテ獨立反抗セントシ、爲ニ支那ハ滿州ノ煩累以外ニ更ニ蒙古ノ困難ヲ增加シ、又滿州其物モ南親王(清朝ノ宗清中シテ袁世凱ノ最モ忌憚セルモノナリ)ノ旅順ニ入リテト在滿宗社黨ノ之ニ密通スルモノアルトニ依リ、新ニ其内憂ヲ發生シ、滿蒙ニ對スル支那ノ政治的形勢ハ此際ヲ以テ全然一變シタルモノナリ、(當時支那及露國ノ外此ノ形勢ハ變化ヲ重視セザレバ多シ)是ニ於テ袁政府ハ主トシテ治蒙ノ方策ヲ講ジ、先ツ利ヲ以テ蒙古王族ノ懐柔ニ勉メ、一掃ハ多少ノ効果アリトモ、素ヨリ其心服ヲ買フニ足ラズ、外蒙及東蒙ノ諸王公ハ露國ノ使節ト後援ニ依リ庫倫活佛ヲ盟主トシ、遂ニ舉兵シテ民國政府ニ對抗スルニ至リタルト、露國ノ近状トシテ前節ニ記述シタルカ如シ、故ニ又威壓手段ヲ執リ征蒙軍ノ北伐トナリシモ、物資ト宿營ニ乏シキ蒙古内地ヲ横断シテ遠ク敵地ニ進軍スルカ如キハ到底不可能ニシテ、(游牧ニ慣レル蒙古人ハ可能ナラズ)

MT 1614 6 1437

MT 1614 6 1436

若シ強テ外蒙ニ出兵セントセハ、遠ク東蒙ヲ迂回シ洮南府附近ヨリ呼倫貝爾(黑龍江者)ニ出テ東方ヨリ庫倫ニ入ル外途ナキハ蒙古ノ内情ニ通セル者ノ能ク了知スル處ナリ、露國又之ヲ知ルカ故ニ支那兵ノ北行ニ東清鐵道ノ便ヲ借サハルニナラズ、陸路ヨリ呼倫貝爾方面ノ支那増兵ニ抗議シテ一兵モ入ルヲ許ス、為ニ外蒙ノ威壓ハ實方ナキ支那政府ニ取り至リ絶望ニ歸セリ、又内蒙ニ於テモ、征蒙軍ノ軍資缺乏シテ進攻ノ餘カナク屢々蒙兵ニ襲撃セラレテ敗退セシガ、適々日露新協約成立シテ(昨年七月中旬)露國俄ニ東蒙ニ對スル煽動ヲ控ヘ、又日本ハ南滿鐵道ニテ支那兵ノ北送ヲ默許シ(武裝解除ニ名義ニテ)為ニ東蒙ノ支那軍比較優勢トナリ、昨年九月終ニ彼ノ島泰至ノ蒙軍ヲ破リテ稍ヤ威壓ノ目的ヲ達スルヲ得タリ、即チ支那ハ日露協約ノ間接庇護ト日本ノ好意的中立トニ依リ内蒙ヲ保有スルヲ得タルモノニシテ之ニ對シテハ充分日本ニ報酬スヘキ價值アルモノトス、然ルニ袁政府ハ却テ内蒙ニ

MT 1614 6 1438

對スル日本ノ野心ヲ精疑シ、爾來外蒙ノ伴有テ断念シテ内蒙ノ確保ニ専心スルニ至リタルニト、後日ノ行跡ニ徴シ殆ト疑フ筈ニシ共後十月ニ至リ、彼ノ露蒙協約締結セシ喧傳セシレテ支那ノ國論一時ニ激昂シ、議會ニ亦類リニ政府ノ無能ヲ攻撃シ、當時ノ外交總長梁如誥ハ自ら責ヲ引テ辭職シ陸徵祥之ニ代リ、專ラ言文ヲ以テ露國トノ折衝ニ從事セシモ、是レ唯々國論ニ對スル形式的抗議ニ過キスニテ、袁政府ノ内意ハ已ニ外蒙放棄、内蒙保持ノ方針ニ決定レ居リ、其提出セル露支協約案ノ内容ニ見ルニ、唯々蒙古ニ對スル宗主權ノ繼續ヲ文字ノ上ニ得ントセルノニシテ、統治ノ實權ハ全然露國ニ委レテ顧ミサルノ跡明白ナリトス、而シテ露國モ亦袁政府ノ内意ヲ偵知セルガ故ニ(表面袁政府ノ密偵トナリ其實露國ノ密偵ヲ意味スル者ナリ此ノ内意ハ袁政府ノ露國ニ對シテ)終始頑トシテ支那ノ袁領ヲ容レズ、遂ニ無要ナル口筆ノ交渉ヲ断絶シテ外蒙ニ對スル自由行動ヲ宣言スルニ至レリ

MT 1614 6 1439

袁政府ノ外蒙放棄内蒙保全政策ノ實行ニ任シタルモノハ袁世凱ノ第一股肱ト謂フヘキ熊希齡ニシテ、彼ハ昨年十月熱河都統ニ任命セシテ任地ニ赴キ、爾來利ヲ以テ内蒙諸王公ノ懷柔籠絡ニ力アルト同時ニ類リニ日本ノ野心ヲ吹聴シテ(熊希齡、日本ニ對スル失言トシテ)蒙古人ノ危懼ヲ誘致シ、且ウ陰ニ陽ニ日本人ノ内蒙ヲ排斥シ(支那政府ハ内訌ノ實ヲ拒絶セリ、且ウ在来ノモンチニ對シテモ嚴密ニ監視ヲ加ヘテ放逐セントシソアリ)自ラ内蒙各旗ヲ聯合シテ省政ヲ布クノ方策ヲ執リ、其階梯トシテ熱河官廳組織章程(武朝鮮總督府ノ官制ニ類)ヲ發布シテ先ツ熱河一帯ノ施政ヲ開始シ、又漢蒙聯合公司(其組織シ、蒙支ノ官民協同シテ殖産工業ヲ經營シ、以テ他國ニ對シテ内蒙ニ於ケル利權ノ保全ヲ企圖セリ、蓋シ外蒙放棄内蒙保全ノ政策モ、又之ニ伴フ排日治蒙ノ企圖モ、現時ノ支那ニ取リテハ幾宜ヲ得タル理想的計畫ナレモ、其實績ハ今日ニ至ルモ未タ舉ラズ)内蒙王族ノ大部ハ省政ヲ布ケレシ其ノ世襲ノ旗領ト王權ヲ失フヲ嫌忌セルニ

MT

1614 6

1440

ナラス、清朝ニ不忠ナリシ袁世凱ニ對スル惡感ハ容易ニ消盡セザルヲ以テ、寧ロ外蒙ニ倣ヒ日本又ハ露國ノ後援ヲ借リテ自立セントシ、如シ外蒙ノ勇將陰付陶等外蒙軍ヲ率キテ内蒙ニ侵入シ、未ク所在支那兵ノ掠奪ヲ怨メル蒙民蜂起シテ之ニ應シ、内蒙一帯ノ擾亂終始息ム時ナク、最近ノ情報ハ内蒙交通ノ最要地點タル多倫諾爾附近ニ於テ征蒙軍ノ不利ヲ傳ヘリ、素ヨリ蒙古軍ハ木支烏合的ニ組織的戰闘力ヲ有セト雖モ、若シ此ノ要地ニシテ其手ニ歸セザル、形勢ハ愈ヨ支那ノ為ニ非ナリト謂フヘシ

○ 以上ハ支那ノ蒙古方面ニ對スル政治的近狀ナルカ、滿州東三省ニ於テハ其情況較々異ナル處アリ、北滿黑龍江省ノ全部カ事實上已ニ露國ノ手裡ニ歸シタルハ前節ニ記述シタル如クニシテ、抗爭ノ實力ナキ支那ニ取リテハ是レ亦已ク得ザル處ナリ、然ルニ南滿州ニ於テハ日本カ終始正道ヲ踏テ北京條約ノ既得權以外ニ進取の態度ヲ

MT

1614 6

1441

執ライルトトシテ支那ハ表者親日ヲ装フテ裏面ニ排日ヲ策シ日本ノ勢力範圍ヲ其鐵道附屬地内ニ局限スルニ勉メニ三合辦事業(本溪湖煤鐵公司又ハ鴨綠江伐木公司如キ)ノ外殆ト在滿一切利權ヲ割與スルコトナク今日ニ至ル迄幸ニ大過ナキヲ得タリ故ニ南滿ハ北滿如キ外交上ノ損失無シト雖モ憂患ハ却テ其ノ内部ヨリ發生セントスル兆候アリ憂患トハ他無シ東三省特ニ奉天吉林兩省ノ財政ノ窮迫是ナリ一昨年ノ革命前途ハ東三省ノ財政情況ハ比較的可良ナリモ奉天省ニテハ革命亂ノタメ在滿軍隊ノ遽ニ擴張サレタル民國政府トナリ官吏ノ増加ニシテ等ノ原因ニ依リ昨年度末ノ行政費ハ百萬元以上ノ不足ヲ告ケ到底租稅歲入ヲ以テ之ヲ填補スルノ途ナク又中央政府ヨリ補助スルノ望モアラス故ニ軍隊減員ヲ斷行スルカ或ハ地方借款ニ待ツノ外他ニ救済ノ方法アラザルナリ然ルニ軍隊減員ハ之ヲ率フル師團長張作霖馮麟閣等カ自家ノ勢力ヲ保持スルタメ反抗ス

MT 1614 6 1442

ク、又借款モ適當ノ擔保ナシテ外國資本家ノ之ニ應スルモノナカルレ、(米國ハ進シ此借款ニ應ジ)又吉林省ニ於テハ從來此ノ省限リニ發行スル日本ヨリノ抗議アルヘシシテ歲計ヲ融通シ来リタル不換紙幣(官帖ト稱)カ其ノ濫發ノ結果近時益々其價額ヲ失ヒ今ヤ殆ト原價ノ二分ノ一以下ニ暴落シテ官吏商民モ之ヲ授受セザルノ實情ヲ呈シ更ニ之ヲ兌換紙幣ニ引替フルタメ其ノ資本金ヲ借款セントシ露清銀行等ハ之ニ應ジテ吉林省ノ財政ニ干渉セントレツツアリ此等ノ財政問題カ如何ニ解決セルヘキカ又解決サレトモ政治上ノ情況ニ如何ナル變化ヲ来スヘキカ是レ將來ニ最モ留意スヘキ處ナリ

右ノ外南滿ニ於ケル支那ノ内憂トシテ顧慮ヲ要スルモノハ宗社黨ノ陰謀ナリ素ヨリ隱微ノ間ニ潛動シタルヲ以テ此宗社黨ノ勢力カ及連絡等ヲ審ニスルコト難シト雖モ其ノ伏在ルコト何等カ企圖レツツアルコトハ疑ハ容レズ彼等ノ多數ハ熱誠ヲ清朝回復ヲ希フニ

MT 1614 6 1443

アラスカ自利ノ為ニ現状ヲ破壊セントスルモノニテ、滿蒙各地ニ跋扈セル數萬ノ馬賊モ亦現ニ制規軍ヲ裝ヘン張作霖、馮麟閣等ノ部下モ之レニ内通セル者多ク旅順ニアル前親英、内蒙ノ諸王公ハ勿論御背腹昧ナル張作霖、馮麟閣ノ如キモ協同連繫ノ事ヲ起シヤ計リ難ク、唯々彼等ノ恐ルル處ハ對抗ノ目標タル民國政府ニアラスシテ、日本政府ノ態度如何ニ存スルカ如ク、若シ日本ニシテ之ヲ默諾スルトキハ、別ニ具體的後援ヲ與ヘサルモ、正ニ蹶起スヘキヲ信スヘキ理由ナキニテラス

○之ヲ要スルニ滿蒙ニ於ケル近状ハ決シテ支那ノ為ニ樂觀スヘカラザルモノ多ク、而テ革命新興スヘキ時機ニ際シテ却テ斯ク内蒙外患ニ苦シテ益々窮境ニ入ル所以ハ、財力ノ窮迫ニアラス、滿漢ノ不和ニアラス、武力ノ欠乏ニアラスシテ、主トシテ左ノ諸項ニ素因ス

(一) 大總統袁世凱ハ革命初期ノ元首トシテ、最要ノ資格タル德望

ヲ具ヘサルニ

(二) 國民一般ニ自利ノミヲ主トシテ、國家ヲ憂ヘサルニ

(三) 内治外交共ニ權術ノミヲ弄レ、誠意ヲ欠ケルニ

四、滿蒙ニ於ケル日本ノ近状

○我日本ハ本来滿蒙ノ政治的現状維持ヲ目的トシ、北京條約ノ既得權ニ準據シテ常ニ正道ヲ以テ終始シ、近時殆ト中立不動ノ姿勢ヲ執リ、故ニ其政治的近状トシテ、特記スヘキモノナク、然ルニ其維持セントシタル一年前ノ現状ナク、ハ、已ニ他國ノ為ニ破壊サレタルト前段ニホメタル如クニシテ、我勢力範圍内ノノ現状スラモ將ニ内外ノ壓迫變動ニ依リ變化セシメシツアルカ如ク、即チ正當ニ言ハバ現状ハ已ニ維持サレザリモノシテ、若シ此儘ニ推移セシムレハ、今日ノ現状モ亦之ヲ他日ニ維持スルノ困難ナリ、抑々所謂勢力範圍志特種ノ得權ハ素ヨリ公然他ニ認メラレタルモノニアラス、若シ北京條約ノノ準據スルモノ自ラ其勢力ヲ租借地及

MT 1614 6 1445

MT 1614 6 1444

鐵道沿線之局限シテ其以外ニ及ス能ハルニト明白ナリトス、然レトモ
 已ニ自露協約ノ如キモノ存在スルトモ之ヲ得失ハ今日措テ問ハス、其打
 消サレサル限リ、飽迄モ錫得ノ權利トシテ擁護スヘキコト言フヲ俟テサル
 處ニテ、其擁護ハ他國ノ積極的動作ニ對シテ消極的姿勢ヲ以テ遂
 行サレ得ヘキモノニアラス、故ニ現状ヲ維持セントモ、寧ロ他ニ先チ撤宜ヲ制
 シテ積極的ニ行動スルヲ要ス、加之我國ノ目的トセル政治的現狀維
 持ニ伴フ國利政策ノ主旨ハ經濟的發展ニシテ、其經濟的發展
 モ之ヲ第一ニ企圖スルハ殆ト不可能ニ屬シ、大抵先ツ政治的發展ニ據
 リテ獲得サルヘキモノナリ、彼ノ鐵道敷設、鑛山採掘又ハ土地經營ノ如キ、
 利權トシテ之ヲ我手ニ收ルニハ、主トシテ政治上ノ力ニ待ツヲ要シ、場合ニ
 依リテハ又之ヲ軍事上ニ助ケサル可ラス、已ニ之ヲ發展ト謂フ、其政治的
 ナルト經濟的ナルトヲ問フ、現狀ヲ變化シテ向上セシムルノ謂ヒニシテ、此點
 ヲリ見ルモ、現状ハ竟ニ自ラ維持ス可キナル事由アリトス

MT 1614 6 1446

我日本カ他國ノ積極的進取ニ對シ、自衛上積極的手段ヲ執ルノ已ハ
 ヲ得サルニ至レルト前部ノ如ク然レモ、今日遠ニ本來ノ經濟的發展主義
 ヲ變シ、北隣ニ做ラシテ侵襲主義ヲ執ルハ尚ホ考慮ヲ要ス、斯クノ
 如キハ自ラ他動的機會ノ到來スキ時節アルヘク、成功ヲ急ヒテ強ク
 今日ニ機會ヲ制ラントモ、却テ外ハ列國ノ野心ヲ挑發シ、内ハ國民
 ノ負擔ヲ大ナラシムルノ虞ナレトモ、故ニ本來ノ主義ヲ變更セサル範圍
 内ニ於テ我日本ノ執ルヘキ手段ハ大要左記ノ如クナルヘシ

對支那

- (一) 英、露、佛等ノ公認セル我ノ滿蒙ノ勢力範圍ヲ支那ノ公
 示シ(支那ハ已ニ之ヲ知悉スレトモ)、此ノ範圍内ノ土地、鐵道、鑛山、森林
 等ニ關スル一切ノ利權ハ我カ承認ナクシテ他ニ割典セシメ
 サレテ契約スルト同時ニ自ラ進テ此等ノ利權ヲ獲得スルニ力
 ムルコト

MT 1614 6 1447

(註) 支那ハ他外國ノ利權ヲ滿蒙ニ侵入シ日本ニ其勢力範圍又ルノ名實ヲ共ハサントスルノ意向アリ

(三) 南滿内蒙ニ於テ邦人ノ土地經營(支那人ノ名)ヲ獎勵シ之ニ對シテ支那官憲ノ妨害ハ威力ヲ以テ掩護スルニト

(註) 土地經營ハ滿蒙ニ於ケル經濟的發展ノ最も有望ナルモノナリ、然レ條約上ニ於テ土地所有權者ノハ永代借地

權ナキ邦人カ鐵道沿線以外ニ土地經營ヲ進ムルニハ威力ノ援助ニ依リテ外強ト成功ノ望ナシ、今日ノ如キ情態ニ

テハ如何ナル資本家モ後患ヲ恐レテ投資スルモノナラン

(三) 内蒙ノ行政的現状ヲ變更セズシテ其秩序ヲ回復セシメ、要スレハ我カ威力ヲ用ヒ、以テ内蒙ニ我威信ヲ立ツルニト

(註) 支那ハ内蒙ニ省政ヲ布カントシ内蒙王公ハ之ヲ好マス、又蒙民ハ支那兵ノ掠奪ニ若シテ之ニ反抗シ動亂息

一四

ハ時キニ際シ日本カ終始之ニ干渉セサレトキハ、竟ニ内蒙ノ絶縁セラレテ其勢力範圍ノ實ヲ失フノ虞ナリ

(四) 奉天、吉林兩省ノ財政困難ヲ救済スルニ、相應ノ擔保ナキニ勉メテ其地方借款ニ應スルニト

(註) 兩省財政ノ困難ハ事實ニシテ地方借款ニ依リテ外救済ノ途ナキハ明白ナリ、若シ此間ニ他國ヨリ借款セシム

ルトキハ、他日滿蒙問題ヲ解決セトスルニ至リ、又カラサル障害トナラン

對露國

(一) 日露勢力範圍ノ界線ニ基キ内外蒙古ヲ區分シ外蒙軍ノ

内蒙ニ侵入スルヲ禁スルニ同時ニ内蒙兵ノ内蒙ニ入ルヲ止ムルコト

(註) 由來内外蒙古ハ一團トナリテ自主セントス傾勢アルモノナ

MT

1614 6

1449

MT

1614 6

1448

又、現時、如内外蒙人カ露國ノ間接援助ヲ得テ
内蒙ヲ攪亂スルコトハ、竟ニ日露協約ノ主義ヲ撼却
スルニ至ルノ虞アリ

(二) 露國將校又ハ探檢者ノ内蒙ニ入ルヲ禁ムルコト

(註) 日本人ノ内蒙ニ入ルハ露國ニテ嚴禁セラレ、内蒙ニ入ルハ支

那ヨリ拒絶セラレ、ニ反シ、奉天、長春等ヨリ内蒙ニ入ル

露國人ノ數ハ毎月十數人ヲ以テ算セラレ、彼等ハ單ニ

探檢調査ヲ主トスルモニアラスレテ多クハ内蒙軍ニ混入

シテ使味教唆ヲ目的トセルカ如シ

外ニ對シテ斯ク多少ノ積極的手段ヲ施スニハ、我官民上下一致シテ之ニ當
ラセル可ニサルハ勿論ニシテ、政治、經濟及軍事ノ三機關カ同一ノ目
的ニ向テ相協力セザル可ラス、然ルニ南滿ニ於テ刻下ノ内情ヲ觀察
スルニ、政治、軍事及經濟ノ三機關カ各々個々ニ動作シテ協同

ヲ欠ケルノミナラス、甚シキハ相抵觸シテ甲ノ進ムニスル處ソ乙之
ヲ退ケントスルカ如キ實跡アリ、斯ノ如キハ獨リ一國ノ目的ヲ達成
スル能ハサルノミナラス、外ニ對シテ我威信ヲ損シ、其間接ノ悪影響
蓋シ敷少ナラサルヘシ、又クモ官邊ニ屬スル都督府、領事團及
滿鐵會社ノ三大機關ハ終始歩調ヲ揃ヘテ同ノ方針ヲ以テ進
マサルハカラス、若シ如何ニシテモ協和シ難トセハ、断然之ヲ打テ
一團ト成レ一指揮ノ下ニ立タレムルヲ可トス

MT

1614 6

1451

MT

1614 6

1450